

におさえて、練習するよう心がけた。以上は個人の考えて、一年全体の考えてはいないことを、ここに述べておく。今一番望む事は部員があと一年生二人ぐらいほしいということである。



# 先 非車

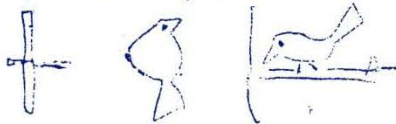
⊗  
⊙  
氏

先輩とは奇妙なもので、弱い時には薄情なようだが、一旦強くなりかけると、戦も盛況となり、アドヴァイスも親切に多くなつていくのを見ると、必ずしもそうとはばかりは云えぬらしい。僕も現役時代には、汗水たらして（冬には鼻水をすりながら）先輩のなげるボールでキャッチの練習をさせられた。僕達のころは、総合プレーよりも基本プレーの練習が非常に多かったせいとか、どの先輩が来られても、同じようにしんどかった。

幸い二年の中頃から連勝記録を作ったりして、その度毎に練習はひどくなり、先輩も教を増していったように思う。先日作られたクラブ名簿を見ると、僕達がしぼられた事のない先輩はほとんど見当らない。合宿と云えば、先輩と現役とがほぼ同数泊つたというところも記憶にある。現在では社会の老木となつた橋本老人もその頃は合宿といえは、超高校級のダツジュターンを、百本ノックを、と先頭に立っておられた。中学校時代には何もやっていなかった僕がよくその頃たえられたものだ。今さらながら感心する。

入学後初練習は山中氏のコーチがたつた。その翌日だったか、中江氏が修学旅行より帰って来られて、一緒にやつたが、小さいのに、どなりちらされた腹を立ててみたが、後でやむを得ないとさとりされた。西さんの足に、腰にあとろがされたのもあぼえてゐる。

一年の夏には、丸山・津田・山中・広田・橋本氏等、名前をきいただけで身のひきしまるような人のゴリ子だった。津田さんの集中パスでし



ぼられたのは、人指し指とあや指をつき指  
でほらし胸をつかつてつかまざるを得な  
った事で、今でも僕に良い教訓となってい  
る。山中氏のランパスもそのころの名物だ  
った。その頃は、誰ひとり弱音をほくもの  
がいなかったし、田中先生も練習につきざ  
りだったせいかな、明日の事など考えずに、  
今日に体力を傾注する気持になれ、「ウブ湯  
での裸の一時が最大の楽しみでさえあつた  
へ三年の夏だったか榎氏によって制限時間  
が定められてしまったが」

体力も付き、一人前にプレーを出来るよ  
うになって二年の夏の合宿を迎えたが、こ  
れが予想を全くくつがえしてしまった。一  
日目の早朝のロードワークをやつと終り、  
一息入れている時、中江氏がトランプをや  
ると云い出し、一目目だし、体力の余力も  
あつたので数人がそれに興じていると、高  
津ハンドボール部では津田氏と並んで赤鬼  
と青鬼とたとえられていた榎本氏があらわ  
れ、宿舎に顔を出すなり、おれは元氣と見  
たしとただ一言（これはあまりにも有名なエ  
ピソード）。そしてその日の朝の練習がはじ  
まった。

中江氏ですら頭の上らぬ兩人にしぼられ  
て、「ウブ湯」にめしむくわずにいかにされ  
たのがかれこれ七時半、いやはや、もう、

あれだけは、今思い出してもぞつとする。  
その合宿を境にしてハンドボール部が一  
つのピークを作り上げたのだから面白いもの  
である。プロ野球などで三年計画などとよ  
く云うが、三年制の高校でもやはり、中江  
氏の時代、石崎氏の時代の猛練習を至て我  
々があつたのだと思うと先輩とは一概に現  
役の不調をたぐいたずらに嘆いていてはな  
らないと、OB二年生にしてしまふかと分  
てきたようである。

高校の運動部では、たゞぎびしい練習が  
よい結果をもたらすものでないと僕は思っ  
ている。僕はOBとして自分の経験から（こ  
れを押しつけるつもりはない）きびしい練  
習も必要だと思うが、現役部員の一人一人  
がクラブに自負をもち、和気あいあいの内  
に、もり上りをもち、和気あいあいの内  
に、優勝する事に匹敵する部としての大き  
な勝利だと思ふ。そしてこの状態において  
こそハードトレーニングもでき得るし、又  
有効なのだと思つている。僕自身として、  
僕達をすぐれたプレーヤーとして立たせ、  
優勝までさせたアレーヤーとして最高の部  
に育てあげて下さった先輩諸兄に謝意を表  
し、またそれに見ならぬ、出来るだけ長く  
、OBとして、また大学生として練習にはげ  
みたいと思つている。

了